

あいづち「そうなんです」考

—使用に対する評価と定着の可能性—

小林 美恵子

1. はじめに

小論では、「そうなんです」というあいづち⁽¹⁾について、その文法的性質を検討し、使用に対する評価と今後の定着の可能性を探る。問題とするのは以下の(1)ではなく(2)のような使い方で、文法的には間違いで、不自然であるとも考えられるが、近年耳にすることが大変多くなったものである。

(1) A: あなたとCさんは高校の同級生でしょう。

B: そうなんです。よく一緒に遊んでましたよ。

(2) A: わたしとCさんは高校の同級生ですよ。

B: そうなんです。では当時から親しかったんですか。

A: いや、高校時代はお互いにまったく知りませんでした。

B: そうなんです。

(1)は、AがBにとっての既知情報「BとCが高校の同級生である」の真偽をBに確認し、Bがこれを真として肯定する応答である。「そうです(よ)」「そうなんです(よ)」と置き換えることが可能であり、むしろその方がより適切な答え方だと思われるが、実際の会話の中では「ね」のついた形もしばしば使われ、間違いとまでは言えない。

いっぽう、(2)はAがそれぞれ自明の情報として「AとCは高校の同級生である」「AとCは高校時代にお互いに知らなかった」を提示しており、その情報はBにとって既知ではないから真偽の判断はできない。したがって肯定の応答「そうです(よ)」や「そうなんです(よ)」で置き換えることはできない。「そう」を含む丁寧体(「です」を含む語形)で置き換えるとすれば「そうですか」「そうなんですか」であろう。

「そう（なん）ですか」は上昇イントネーションで発音される場合は先行発話への疑義になるが、平板もしくは下降イントネーションの場合には「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」（堀口 1997：40-42）「聞いているという信号」（中島 2011：144）などと規定される「あいづち」ということになる。本稿もそれに従うが、とすれば（2）の「そうなんです」も「相手の話を聞いたと伝える」あいづちと見るべきだろう⁽²⁾。

しかし、「基本的には相手も当該の知識を持っていると想定される場合に」「自分の知識と相手の知識が一致していると想定し、これを相手に確認するときは同意要求になり、自分の知識が不確かなときには確認になる」（益岡・田窪 1992：52-53）とされる終助詞「ね」の機能からみると、（2）の「そうなんです」は不適格と言わざるをえない。ここで「そうなんです」の内容は、相手（A）が自明のこととして示したものであり、話し手（B）はもともその知識を持っていなかったのだから、自分の知識と相手の知識が一致していると想定することもできないし、その必要もない。したがって、あえて同意要求や確認をすることもできないし、必要もないからである。

ところが、現実には（1）だけでなく、むしろ（2）のような「そうなんです」の使用が、不自然だ、違和感があると批判されながらも、近年非常に多くなっているようだ。このような用法がなぜ多用されるのか、また今後定着していく可能性があるのかを考えてみたい。

2. ウェブサイトにおける「そうなんです」への言及

（2）のような「そうなんです」はいつごろから使われるようになったのだろうか。本来会話の中で用いられたものゆえに、初出を確定することは難しく、管見ではこれに関する観察、論考なども見当たらない。しかし、ウェブサイト上の言及などからは、おおむね2000年代初頭に現れ、2004年頃にはかなり目立った現象となっていたと見られる。「そうなんです」相槌で検索してみると78,800件、さらに「違和感」を加えると16,500件のヒットがあり、この語に対する関心が高いことがわかる。（もちろんその中には重複するものもあり、単にこの語を使っただけで、この語そのものに対して言及して

いるわけではないものも含まれる)

YahooおよびGoogleの検索ページトップから「そうなんですな 相槌」の含まれる、それぞれ200件のうち、重複などを省くと、2012年8月時点でこの語をテーマとして言及しているものが電子掲示板12件、個人ブログ11件、情報サイト2件、YouTube 1件の合計26件あった。その内容、「そうなんですな」の(2)のような用法への評価などを概観する。なお、次項以降にあげる各ブログ・サイトからの意見引用については、特記すべきものを除き、一々の出典を明示しない。また、重複する内容の意見をまとめたり、内容を損なわない範囲で一部語句の変更や補足を行った。

2.1 個人ブログ

26件のうち最も古いものは、読売TVアナウンサー道浦俊彦が連載する『平成ことば事情』(道浦 2004)という個人ブログの2004年11月のものである。ここでは、最近、「あさいち！」⁽³⁾の番組スタイリストがよく使うとして「そうなんですな」を取り上げ、

「か」(「そうなんですか」)⁽⁴⁾だと知らなかったことに対する「驚き」が感じられますが、「ねー」⁽⁵⁾(「そうなんですなー」)では「驚き」が感じられません。それどころではなく、相手が話していることに対する「関心」も薄いように感じられて、せつかく話しているのに・・・と、ちょっと気分が悪い。でも「ねー」の持つ音の柔らかさが、その不快感を、やや弱めてくれてはいるのですけれども。(道浦 2004)

と評する。さらに同年12月に「追記」として「若い女性」の使用を、2006年8月に男性の使用を報告している。また2007年6月には作家三浦しをんが日経新聞夕刊でこの語について書いたエッセイを紹介し、作家糸井重里の『オトナ語の謎』(2005)にもこの語への言及があることを追記している。

三浦(2007・2012:139-141)は「「そうなんですな」と言われるとどうも気が抜けるというか、肩透かしを食ってもう一度すつ転びそうになるというか、なんとなく尻のすわりが悪い気持ちになる」として否定的だが、糸井は「そ

うなんですわね！」と表記したこの語について次のように述べる。

「さようでございますか」だとかしこまりすぎで、「そうなんですか」だと驚きすぎで、「そうなんですわね」だと同意しすぎ。そういう事情はなんとなく知っていたんですけどやっぱりそういうことでしたか、そういうふうなことになるますよね、私もそうなると思いますよ、という実に微妙なニュアンスを表現する、これぞまさにオトナ語。経緯（ママ敬意？）、親しみ、踏み込み過ぎない礼儀、など複雑に入り組む感情を見事に表現している。（糸井 2005：207（ ）内は筆者注記）

ここで糸井はやや皮肉混じりながら、ともかくビジネスの交渉などに有用な言い方としてこの語を評価している。

個人ブログは道浦（2004）以外に2008年2件、2009年1件、2010年1件、2011年3件、2012年3件と合計10件見られるが、いずれも「そうなんですか」というあいづちを打たれる側として、違和感や不快感を持つという主旨である。その理由としては「興味がないがとりあえずあいづちを打ってみたという感じ」「冷たく突き放された感じがする」「こちらの答えへの不満が感じられる」「同意か疑問かわからず馬鹿にされた気がする」など、相手が自分の意見に対してきちんと聞いて肯定しているのではないということを感じ取って感覚的に違和感を持つという意見が多い。なお、「知っているなら聞くな！」「同じ経験でもあるんですか？」「知ってたんですか？」と聞き返せばいいのような言い方で、「そうなんですわね」が未知情報の提示に対するあいづちとしては間違いであることを述べたものは、11件中2件であった。

また「断定に「ね」をつけて曖昧にしている」「親しみをこめて「ね」をつけている」「「ね」は目上の人限定。一応敬語っぽい表現」など終助詞「ね」に対する言及もある。「柔らかい感じがするというのはわかる」「ちゃんと聞いて理解しているということを示すつもりで言っているようだ。柔らかい対応をしようとしている」などと理解を示すものもある。これらの意見は概ね、道浦（2004）と重なると言ってよいだろう。

2.2 電子掲示板

いわゆる掲示板と呼ばれる投稿サイトの中で「そうなんです」に関してのやり取りがされたものは12件であった。年代的には2007年2件、2008年1件、2009年4件、2010年3件、2012年4件である。このうち『Yahoo知恵袋』では2007年8月、2008年7月、2010年7月、2012年3月の4回、読売新聞(YOMIURI ONLINE)の『発言小町』では2009年7月と2010年1月の2回にわたってこの語についての投稿・意見交換が行われている。

これらの掲示板では最初に質問が提示され、それに対して投稿された回答や意見が順次掲示されていく。「そうなんです」に関する最初の質問投稿の過半は「違和感があるが正しい使い方だろうか」と問うものだが、「自分はよく使うが失礼だろうか」「上司に使用を批判されたが、自分としては間違っているとは思えない」などと使用している立場で他者の意見を問うものもある。

これに対して複数の回答が寄せられるのが普通だが、「正しいか?」と聞かれれば「正しい」「間違っている」両方の回答が寄せられるのが成り行きで、これらの掲示板では個人ブログとは違い、「そうなんです」というあいづちを容認する意見がほぼ半数を占める。

ちなみに『教えて!Watch』(2007)というサイトでは質問者が「そうなんです」について[1]あなたは使うか、[2]あなたの周りに使っている人はいるか、[3]違和感を持つか、[4]日本語として正しい言い方だと思うか、という4つの問いを出し投稿を求めている。これに対する回答者は8名だが、[1]で「使う」2名、「使わない」が6名だったほかは[2][3][4]とも回答はそれぞれ4名ずつという結果であった。

「違和感」としては、「はじめから知っていたことのように聞こえる」「その人が知らない事実なのに、同調しているよう」「見ず知らずの人に言われるとあなたにそう言われる筋合いはないと言いたくなる」「自己完結していて不快感がある」などの理由があげられている。

また、肯定意見として、「自分に関係ないこと、相手の言うことの正否が判断できないときに、「そうなんですか」と同じ意味で使う」「相手の言っていることに賛成ではないが、まず受け入れるという意図で使う」「悪口や

非常識な意見に同調したくない、相手の味方とは思われたくないときだけ使う」「相手の発言を否定も肯定もせず、ただ聞いていただけということを中心できる便利なことば」などと相手が持つであろう違和感を前提に、ことばの上では同調しながら実は相手の意見に賛成（も反対も）する気はない、とりあえず聞いてだけはおくという意を表して使うのだという意見も目立つ。

「相手を否定せず、自分を押し付けない感じが好き」「否定でも肯定でもなくちゃんと聞いているという感じを表す使えることば」というのもこれに類する賛成意見と言える。

ちなみに情報サイトの1つOK Guide (2012) は、『自分を犠牲にしない「そうなんです」のすすめ』というテーマで「自分にはない意見に対して「自分もそう思う」とは思えないけれど新しい意見だなと思ったら「そうなんです」「そうなんですか」。もし、その中で「おっ、いいじゃん」と思うなら、テンション高めに「そうなんですか！」と言ってみてください」と勧める。また歌手・井上ヨシマサはYouTubeの動画で「あまり好きでもない上司から「晴海にめっちゃ美味しいイタリアン見つけちゃってさ！」と鼻息荒く誘われたとき・・・断りたいけど、でも嫌と言って空気を変える訳にもいかず・・・」受け流す「魔法の言葉」として「そうなんです」を歌う(井上 2012)。

もっとも、これらも言われた側からすると「他人事のように」「すごくあしらってる感じ」「脳内変換すると「あ、そ」という感想になるわけだ。

さらに積極的な肯定意見として、「知らないことを聞いて、そのことについて共感しようという姿勢がある」「相手の言ったことに了解の意を示すとともに初めて知ったことへの少々の驚きをもこめて返答する」「相手の話と同調して自分も同じような感覚（印象）を持つことができるという感じ。悪くない言い方」のように、初めて聞いた情報であっても了解・共感・同調を積極的に示す意図で用いるのだと、「そうなんです」を支持するものもある。

また、掲示板では「使われる場」や「使う人」に関する意見が比較的多い。「業界用語として受け入れる」「女性が固い表現や強い語気を避けるために使う」「30代事務系女性中心のことば」「美容師とか世間話を無理やりさせられる感のある職業の人のことば」「ショップの20代店員や、百貨店の40代女性店

員など。接客の際の丁寧語として定着し始めているのではないか」などである。「上司からそう使うように教育されました。特に相手への同調を女性らしく表現するためだそうです。私も使い始めたときはかなり違和感がありましたがもう慣れました」(発言小町(2010) 20代前半営業ウーマン)というものもあるが、いっぽう「上司に注意された」「ビジネス用語、マナー用語としては使わない。美容院の店員の「さようございますか」は気持ちが悪い。ショップ店員にきちんとした用語を求める人はいないから、それはそれでOK」と、相反するような教育や意見もある。比較的若い世代の女性の販売員や美容師など接客業者が、客の、あまり興味関心を持たない世間話に対してよく使うあいづちという捉え方が多いが、実際には掲示板には「自分も使う」という男性の投稿もあり、道浦(2004)の報告にもあるとおり、男性がまったく使用しないというわけではない。

掲示板サイトには「コンビニ・ファミレス言葉と同じ意識から生み出されている」「電話で名前確認をするとき「〇〇さんですね」と確認すべしと教えることからきている」「関西/九州方言の影響だろう」などと、「そうなんですね」の発祥を探る意見、「正しくても失礼と思われることはある」「使われて良い気はしないという人に対しては使わない」「相槌の慣用句だと思えばよい」などの正否・好悪よりも実利を中心とする意見なども掲載されている。

3. 分析—違和感の根拠と肯定感の根拠—

2であげられた「そうなんですね」の評価は概ね次の3つにまとめられる。

- ①初めて聞いたことに対して、あたかももともと知っていたかのように答えている。
- ②相手が言うことに対して、自分には関係がないし、賛成でもないが聞くだけは聞いておくという感じ。
- ③相手の言うことに対して、初めて聞いたことでも、共感や同調を示す丁寧な言い方。

①は違和感として否定され、②は言われる側からは「よそよそしい」など

として否定されるが、使う側にとっては「便利な言い方」と肯定もされる。
③は積極的な肯定意見と言ってよい。

「そうなんです」にはこれらの評価の根拠となるような文法的要素がどのように含まれているのだろうか。以下で検討していく。

3.1 終助詞「ね」

「そうなんです」であれば、特には不適格とはならないことから、これらの違和感や肯定意識の根拠を担っているのは、1つには終助詞「ね」であると考えられる。周知のとおり「ね」は「聞き手に対して用いられる終助詞」である。「そうなんです」という話題内容について「ね」「よ」「か」などの終助詞を後接することにより、話し手におけるその話題内容の位置づけが決定されるが、「ね」がついた場合決定される位置づけは、話題内容に対する話者の認識そのものではなく、その話題内容を伝達する話者の態度である。

3.1.1 違和感の根拠

益岡（1991）は田窪（1990）の論考や大曾（1986）の観察をもとに、「ね」を「話し手の知識を聞き手に情報として伝えようとする演述型の対話文においては（中略）話し手の知識と聞き手の知識が基本的に一致すると判断される場合に「ね」が用いられる」（p.96）とした。1であげた益岡・田窪（1992：52-53）も、この立場からの定義である。繰り返すが、この立場では、（2）のようなあいづち「そうなんです」は不適格である。①の「違和感」はこのような「ね」への認識に依拠するものと言ってよい。相手が自明のこと、特に本人だけが知っているようなことを表明したときに、「相手と（「そうなんです」の）話し手の知識が一致している」として「ね」を用いて返答すれば、話し手はもともと「相手の持つ知識」を持っていたということになり、相手が、わざわざ話題内容を提示する意味はなくなってしまうからである。

3.1.2 肯定意識の根拠

しかし、実は「ね」は聞き手が知らないことを提示することもある。

(3) 「今、何時ですか」

「ええっと、7時ですね」 (野田 2002a : 278 用例より引用)

のような例である。野田 (2002a : 277-281) ではこのような例から「当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ」とした金水 (1993 : 120) を参考に、「ね」には「文の内容を何かと一致させながら聞き手に示すときに用いられる。聞き手の知識や意向との一致を問う用法や、話し手自身の記憶や結論との一致を示す用法がある」とする。さらに聞き手指向の用法には確認要求、同意要求、同意表明、行動宣言があり、話し手自身を指向するものとしては自己確認、回想、拒絶表明があるとする。(3) は「何時ですか」という相手の知識・意向を確認したのではなく、聞かれて時計を見るという過程を経た自分の結論と「7時です」という表現を一致させて答えているということが「ね」によって表される「自己確認」の用法だということである。

これを援用すると、

(4) 「先日、人混みのまっただなかですっ転んでしまいましたね。いやあ、マヌケでした」

「そうなんですね」 (三浦2012 : 139)

この「そうなんですね」は「人混みで転んだ。自分はマヌケだ」という相手の認識を直接的に確認・同意せず、一旦相手の認識から切り離れた話し手自身の内部での思考の過程を経た結論と「そうなんです」という表現を一致させたことを「ね」によって相手に示した自己確認としての用法と言える。つまり、この「ね」は相手の失敗やマヌケさという認識に同意したのではなく、相手が自らについて語ったという事実を話し手自身の内部で理解・確認し、「ね」によって示したのである。

この場合、話し手が「そうなんです」と理解・確認した過程は相手にとっては「知らないこと」である。ポライトネス理論の視点からみれば、このような「ね」は、聞き手が知らない状況を提供、説明するという一種優位な状況の中、「ね」をつけることで口調が緩和されるとして、「発話緩和」と名づ

けられているネガティブ・ポライトネス（宇佐美 1997・2011:241-267）とも言えよう。

このように見ると「そうなんです」に丁寧な共感や同調を感じ、積極的に肯定する③のような主張が理解できる。ちなみに（4）の「すっ転んでしまいましたね」の「ね」のほうは、同じく聞き手の知らないことについて、話し手自身の記憶と表現を「ね」で一致させた回想の用法ということになる。

3.2 「そうなんです」

前項で「話し手自身の内部での思考の過程を経た結論」は「ね」によって「そうなんです」という表現と一致させられたことを示すとした。つまり、この場合「そうなんです」が「話し手自身の内部での思考の過程を経た結論」を示すことになる。なぜ、そう言えるのか。

「そうなんです」（「そうだ」＋「のだ」＋「です」）はいわゆる「のだ」文で、「の」がその前の部分を名詞化することにより、典型的には、聞き手に対する、先行文脈の「説明」を表すとされる⁶⁾。ただし野田（2002b:231-233）は、秘密を告白する「俺、別荘を買うことにしたんだ」のように先行する文脈や状況に関係なく話し手の事実を聞き手に認識させようと説明する例や、さらには心内発話や独話として用いられる「あ、そうだ。今日はお客さんが来るんだ」のように、聞き手とは関係なく、それまで話し手が認識していなかった事態を把握したことを表す例をもあげて「説明のモダリティ」の広がりとしている。

「そうなんです」における「そうだ」は、先行する相手の発話内容を指示詞「そう」に置き換えたものである。相手が言った「そう」の内容を、話し手がそれまで認識していなかった事態として把握したことを、相手に認識させようとするのがこの「のだ」文の機能だと言うことができよう。それは、言い換えれば、「（相手の発話内容をそのまま受けた、そのうえで）話し手自身の内部での思考の過程を経た結論」として示すことになる。つまり賛成・反対はともかく、相手の言うことを自分の中に受け止めた、そのうえで受け止めたという自分の事態を結論として相手に示すのである。あいづち「そう（か）」

であれば、そのような過程なしに、直接相手の発話内容を是非を含め受け止めていることになる。この「そうなんです」はそういう直接性をやわらげ、相手との間にワンクッション置いているということになるだろう。

下降イントネーションの「のだ」文のあいづち「そうなの」や「そうなんだ」も同様に説明することができる。「そうなんですね」はこれらのあいづちを「です」により丁寧化し、さらに「ね」によって発話緩和しつつ話し手の心内結論であることをいわば念押しして相手に示したものと見える。

3.3 「そうなんです」の二面性

「そうなんです」は意味論的に言えば「相手の叙述の肯定」であるが主観的な判断・表現態度としては「賛否は別に、相手の話をとにかく理解した」ということであり、それに対する自分の同意を表明したわけではない。語用論的に言えば文脈によって相手の叙述に対する「穏やかな尊重」にも「遠回しの否定」にもなるのである。それゆえ、話し手にとっては「便利な言い方」であり、聞き手にとっては「丁寧に尊重された」とも「よそよそしく無視された」とも感じられる②のような肯定・否定の二面性が生じると考えられる。

実際に文脈によって「そうなんです」を比較的受け入れやすい場合と、強い違和感が感じられる場合とが存在するようだ。たとえば先の(4)などはどちらかと言えば受け入れやすい例であろう。

(4)の例で仮に「そうですね」と答えたとすれば、これは相手の言う「(自分は) マヌケでした」(=「そう」の内容)への直接的な肯定・同意を「ね」によって相手に表示することになり、形態論的には正しくても、語用論的・ポライトネス的立場からは適当とは言えない⁽⁷⁾。先行する発話内の話者の自己認識が否定的で、聞き手として肯定することが失礼であるような場合には「そうですね」はもちろん、「そうですか」「そうなんですか」の「か」の驚きや感動の語気さえも不適當なこともあり、むしろ「そうですね」によって、「あなた自身がそういう自己認識をしていることはわかった」としておくほうがよいのである。

同様に、相手の先行発話の内容を肯定したくないがはっきり否定すること

ができないという関係での発話や、内容そのものは否定できなくとも自分はそれにかかわりたくないというときにも「そうなんですね」は有効だ。

(5) 上司「芸能人がよく来る店のマスターと知り合っさ」

部下「そうなんですね」

上司「日本人がほとんど来ない店なんだけど、彼女連れてきてく
ださいよー、とかうるさくてさ」

部下「そうなんですね」 (井上 2012 より引用)

(5) では「そう (なん) ですか」と答えて、「一緒に行こう」と誘われる、その可能性を含め、相手のさらなる発言を阻止するように「そうなんですね」が使われる⁽⁸⁾。

以下の(6)(7)なども違和感は比較的少ないのではないだろうか。

(6) タイ在住の専門家「(ウォーターヒアシンスは籠の素材として)

タイでは有名ならしいんですね」

インタビュアー「そうなんですね」(NHK番組『恋する雑貨』2012・
8より採取)

(7) オリンピックメダリスト(自分の取ったメダルを指して)「今まで

応援して下さった方の重さが首にぶら下がっ
ています」

インタビュアー「そうなんですね」(NHKTVニュース2012・8より採
取)

(6)は客観的な事実の説明、しかも説明者自身が「らしい」と推測しているような事柄に対するあいづち、(7)はメダリストの個人的な述懐ではあるが、誰もが共感を持って聞くことができるような内容で、その意味では客観性もあり、インタビュアーや視聴者がもともと答えとして予測するような内容とズレがないということで、どちらもいわば「そんなことはわかっている(予測していた)」としても不自然さが少ない。そこで、ここでは終助詞「ね」も、話し手と聞き手の知識の一致として捉えられても違和感が少なく、むしろ

ろその発話緩和性が効力を発揮するということでもあろう。

いっぽうで、先行の相手の発話が（２）のような個人的な事情に関する述懐であったり、次にあげる（８）（９）のようにかかわることが必ず求められるような仕事上の連絡や、話し手の質問への相手の回答であった場合には「そうなんです」の違和感は大きなものとなる。

（８）先輩高校教員「Aさんには留学担当の仕事をしてもらいたいんだけど、本校では毎年30人ぐらい海外留学しますから、準備事務もけっこうあって、重要な仕事なんですよ。」

新任高校教員A「そうなんですね」（筆者採取の実例 2010・4 A は名字である）

（９）インタヴューアー「俳句甲子園の審査はどのようにするんですか」

取材記者「良いところ、納得できないことも舌戦を繰り広げるのです」

インタヴューアー「そうなんですね」（NHKTVニュース2012・8採取）

いずれの場合も、違和感が大きいのは、このあいづちが、相手の発話内容を「それまで知らなかったこととして」真摯に受け入れるのでなく、そんなことだろうとは認識するが、一応聞いておくという他人事のような感じを与えるからだろう。もちろん（５）のように聞きたくもない個人的述懐を聞かされたというときに、これを逆手に使って、相手の発話を封ずることも可能である。

このような二面性の便利さは批判をされながらも、ビジネス、接客などで、個人的に興味はないような話題、自分の意見を表明したくないような場面でも、相手の話を受けて場をつないでいくというような場合には有効なものであることを否定できない。殊に自らが傷つくことを避けて、直接的な言い方よりも婉曲さや配慮的な表現を重んじる傾向のある現代社会では、この語は「オトナ語」として評価されたり、また、いわゆる「ショップ」や美容院などで相手に立ち入りすぎず、かといって無関心に思われないような接客用語として便利に使われるのであろう。

4. おわりに

間違いだと言われ、批判されながらも使われ続けるあいづち「そうなんです」について、文法的な合理性があることを指摘し、使用の実態にそれがどのように反映しているのかを見た。合理性があるといっても形態的な確かさによって、というよりは、先行する発話の文脈に依拠した語用論的な合理性によって、「相手発話の正否・是非を明示せずに聞いたということのみを示す」というような、文法体系の隙間を埋める用法⁽⁹⁾としてこの語は使われている。正誤で言えば微妙なバランスの上であり、支持があると同時に否定的な意識も消えることはないだろうから、完全な定着は考えにくい、ある場面では大変に重宝な用法として今後も消えることはないだろうとも予想される。興味深い現象として今後も見ていきたい。

注

- (1) 「そうなんです」を「あいづち」とすることについては疑義もあると考えられるが、小論では後述のとおり、例示した「そうなんです」が「そうですか」「そうなんです」と同じく「相手の発話を聞いたという意味の表示」のみをしていると考えられるので「あいづち」と認定した。
- (2) 北野(2000:81)は「そう」を含むあいづちについて、先行のあいづち研究ではこの「そう」が質問に対する応答の一部とは認識されなかったことを指摘したうえで、「そう」が指示表現(照応表現)の一種であり非語彙的な「うん」「ああ」などとは異なる特徴を見せるとする。小論もこの立場に同意し、「そうなんです」の「そう」を指示詞と見なし、「のだ」「ね」などの要素に連なるものとして分析していく。
- (3) NHK総合TVの午前8時15分からの情報・トーク番組
- (4) 引用文中の()については筆者が補足したもの。以下同様である。
- (5) 「そうなんです」については「そうなんですー」「そうなんですね！」などの表記がされる場合がある。これらの表記の違いは、厳密には話者の態度や文意の差を反映するものと考えられるが、道浦(2004 追記2007)が、自らの「そうなんですー」の例示として三浦(2007)の「そうなんです」を取り上げていることから、道浦が表記におけるニュアンスの厳密な区別をしていると考えにくいこと、また小論が文字化された

資料により論考することから、これらの表記については区別せず一括して「そうなんです」
ね」として扱った。なお、筆者自身が採取したり、放送から引用した用例については、
すべて「そうなんです」と、文末長音化せず上昇イントネーションでもないものであ
る。

- (6) 例えば「翌日は、朝、早く目が覚めた。電話がなったのである」で「のだ (のである)」
は「電話がなった」を名詞化し、先行の「早く目が覚めた」事情を説明している。(野
田 2006b:231より)
- (7) この例をあげた三浦は2.1にあげた引用に先だって「私の感覚からすると、こういう
場合のあいづちは「そうなんですか」「そうですか」「そうですね」であり・・・」(三
浦 2012:139)と言っているのだが。
- (8) 2.2に「自己完結していて不快感がある」と批判されている。「自己完結」というのは
相手の側からみれば、その話題に関して次の発話ができない状況を作られるということ
になる。
- (9) 佐藤 (2009:8-9) は「～が売っている」のように多くの人が「間違い」と断定するにも
かかわらず、偶然と片付けられない頻度で出現する「間違い」について既存の文法体系
では的確に事象を表しにくいゆえとして、このような「間違い」を「文法体系の隙間を
埋める用法」と表している。

参考・引用文献

- 糸井重里 (2005) 『オトナ語の謎』新潮文庫
- 宇佐美まゆみ (1997・2011) 「「ね」のコミュニケーション機能とポライトネス」『女性の
ことば・職場編』(2011合本『女性のことば・男性のことば(職場編)』) 現
代日本語研究会編 ひつじ書房
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析1「今日はいいい天気ですね。」—「はいそうです」」『日本語
学』5-9 明治書院
- 北野浩章 (2000) 「応答やあいづちに用いられる照応的な「そう」について：談話データに
見られる自然な対話の特徴」『京都大学言語研究』19
- 金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22-4 大修館書店
- 佐藤琢三 (2009) 「「間違い」は本当に間違いか—文法研究から見た「間違い」—」『日本語

学』28-9 明治書院

- 田窪行則 (1990) 「対話における知識管理について—対話モデルから見た日本語の特性—」
崎山理・佐藤昭裕編『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 中島悦子 (2011) 『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞』お
うふう
- 野田晴美 (2002a) 「第7章説明のモダリティ」『モダリティ』くろしお出版
- 野田晴美 (2002b) 「第8章終助詞の機能」『モダリティ』くろしお出版
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 三浦しをん (2007) 「言語感覚のちがい」日経新聞・夕刊 (2007・6・2) (三浦 (2012) 所収
の同文エッセイ)
- 三浦しをん (2012) 『お友だちからお願いします』大和書房

(ウェブサイト)

- 井上ヨシマサ (2012) <http://www.youtube.com/watch?v=Eq03t-M5iuY&feature=relmfu>
- 教えて！Watch (2007) <http://oshiete1.watch.impress.co.jp/>
- 発言小町 (YOMIURI ONLINE) (2009・2010) <http://komachi.yomiuri.co.jp/>
- 道浦俊彦 (2004) 『平成ことば事情』
<http://www.ytv.co.jp/announce/kotoba/back/1901-2000/1981.html>
- OK Guide (2012) <http://okguide.okwave.jp/>
- Yahoo 知恵袋 (2007・2008・2010・2012) <http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/>

(こばやし みえこ・早稲田大学非常勤講師)